

街に行く

第131回 駿府(静岡) Sunpu

繁栄と悲劇を飲み込んだ街

NHK大河ドラマ「青天を衝け」がちょうど活況を呼びてきていますが、そのひとつの舞台がこの駿府です。小生こそは度々訪れているものの、静岡でなく“駿府”という視点から眺めるのは今回が初めてです。駿府と静岡は違う街なのかといえばそうではなく、明治維新を境に呼び名と街の役割が大きく変わったのです。江戸と明治の狭間で大抵の街はそれなりに変わったのでしょうか。“翻弄された”という意味ではここが代表的かもしれません。

大河ドラマは渋沢栄一が主人公。舞台といえば東京と彼の生まれ故郷の埼玉県深谷です。しかし彼の人生を大転換させた意味では、徳川幕府最後の将軍慶喜が蟄居して余生を過ごしたこの駿府が重要な役割を果たします。もともと徳川家では引退した将軍は大御所と呼ばれ、この街で隠居生活を送るわけですが、実際は江戸にいる将軍より権力を持ち続け院政を引いていました。したがって花の都の江戸にも負けない文化が開けていたのです。駿河湾に面した温暖な気候と新鮮豊富な海産物も大きな要因であったのでしょう。

さて、慶喜は俗に悲劇の将軍と呼ばれていますが、この街にはその側面を感じさせる沢山の足跡があります。彼は新政府の目を逃れ銚子から船で静岡に渡り、護衛の幕臣とともにまずは「宝台院(芝の増上寺の末寺)」に身を寄せています。宝台院はこぢんまりした寺ですが、かつての境内は相当な大きさだったそうです。二代将軍の秀忠の生母が祭られているのですからそれもそのはずですね。お話を聞いた住職はと



駿府城にある徳川家康公之像と弥次喜多像、ギャップがいいですね。

ても上品なジェントルマン。幕府の庇護の下で高い格式と大きな権力を持っていた名残を感じさせるものでした。慶喜の住まいは現在では「浮月楼」という料亭が建ち、彼の家屋であった面影はありませんが、立派な庭園は往時を偲ぶことができます。政に一切かかわらず趣味にしか生き場所がなかった慶喜の心中を思うと複雑な気がします。若くして隠遁生活に入った慶喜は何を思い暮らしていたか。徳川の復興か、日本の繁栄か知る由もありません。趣味の世界では特に写真撮影の技術は凄く玄人はだし。当時の生活様式を今に伝える彼の写真が多く残っています。歴史を紐解けば、その街の繁栄が、何によってもたらされたのか良く解ります。祖先が何を思い、何を守ってきたの

か、街の顔つきがつくられている気がします。

小生の街歩きの新しいテーマも決まりました。どこまでこの街歩きが続くのか解りませんが、皆さんを飽きさせないように頑張りますので、ご声援を宜しくお願い致します。

南一弘



1982年大学卒業後、三井不動産販売に入社。ローンスター・ジャパン・アクイジションズを経て、2001年エースト・ジャパン・エルエルシーを設立。同代表に就任。2005年4月MID都市開発(旧松下興産)の代表取締役に就任。2006年ジャパン・アセット・アドバイザーズを設立。同代表取締役に就任。